

奨励

星を数える夜

詩人・尹東柱(ユンドンジュ)の七十年

奨励	井田 泉 [いだ・いずみ]
奨励者紹介	日本聖公会京都聖三一教会牧師 聖三一幼稚園園長 日韓キリスト教関係史研究会主事

「目覚めた人々は大空の光のように輝き

多くの者の救いとなった人々は

とこしえに星と輝く。

ダニエルよ、終わりの時が来るまで、お前はこれらのことを秘め、この書を封じておきなさい。多くの者が動揺するであろう。そして、知識は増す。」

わたしダニエルは、なお眺め続けていると、見よ、更に二人の人が、川の兩岸に一人ずつ立っているのが見えた。その一人が、川の流れの上に立つ、あの麻の衣を着た人に向かって「これらの驚くべきことはいつまで続くのでしょうか」と尋ねた。すると、川の流れの上に立つ、あの麻の衣を着た人が、左右の手を天に差し伸べ、永遠に生きるお方によってこう誓うのが聞こえた。「一時期、二時期、そして半時期たって、聖なる民の力が全く打ち砕かれると、これらの事はすべて成就する。」こう聞いてもわたしには理解できなかったので、尋ねた。「主よ、これらのことの終わりはどうなるのでしょうか。」彼は答えた。「ダニエルよ、もう行きなさい。終わりの時までこれらの事は秘められ、封じられている。多くの者は清められ、白くされ、練られる。逆らう者はなお逆らう。逆らう者はだれも悟らないが、目覚めた人々は悟る。日ごとの供え物が廃止され、憎むべき荒廃をもたらすものが立てられてから、千二百九十日目が定められている。待ち望んで千三百三十五日に至る者は、まことに幸いである。終わるまでお前の道を行き、慰みに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められている運命に従って、お前は立ち上がるであろう。」

(ダニエル書 一二章三—一三節)

季節が過ぎていく天には

「季節が過ぎていく天には 秋でいっぱい満ちています」

これは尹東柱(ユンドンジュ)という人の「星を数える夜」という詩の初めです。尹東柱は一九一七年に中国東北部間島省明東(ミョンドン) (現在は中国吉林省延辺朝鮮自治州に属する) に生まれ、一九四五年に福岡で獄死した朝鮮のキリスト者詩人です。今からちょうど七十年前、一九四一年の十一月五日にこの詩が書かれました。書かれた場所は、当時日本統治下の朝鮮、現在の韓国のソウルです。尹東柱は当時二十三歳の青年。ソウルのキリスト教学校、延禧(ヨニ) 専門学校の学生でした。延禧は現在の延世(ヨンセ)大学校で、同志社とも交流の深い学校です。

詩の初めのほうを読んでみます。

星を数える夜

(井田 泉 訳)

季節が過ぎていく天には

秋でいっぱい満ちています。

わたしはなんの心配もなく

秋の中の星々を みな数えられそうです。

秋の深い夜、尹東柱は丘の上に乗って、星空を見つめています。満天の星。冷たく冴えわたった空気のなかで、心は平安です。焦りも心配もありません。大きな星、小さな星、白い星、赤い星、明るい星、ほの暗い星……。星はとても多いけれども、ひとつひとつの星がくっきりとしていて、全部の星を数えられそうな気がします。

星のひとつひとつが語りかけてくるようです。星はただ遠くに向こうに見えているばかりではなく、自分の心に宿ります。ひとつ、ふたつ、みっつと……。自分の胸に、星は刻まれてきます。数えられそうな星なのですが、ひとつひとつ大切に心に留まってくるので、一、二、三、四……。というようにとどん数えるわけにはいきません。

胸の中に ひとつ ふたつと 刻まれる星を

今すべて数えきれないのは

すぐに朝が来るからで、

明日の夜が残っているからで、

まだわたしの青春が尽きていないからです。

星はひとつ、ふたつ……。自分の胸に刻まれてきて、いま全部を数えることはできません。こんなにたくさんの星ですから、数えているうちにすぐに朝がきてしまいます。急いで全部いまだ数えなくてもいいのです。明日の夜が残っているのですから。

けれども尹東柱は「明日の夜もあるから」とは言わず、「残っているから」と言います。明日も明後日もずっと日が十分あるというのではない。「残っている」というのは、逆に言うと、夜は、星を数えられる夜は限りがあるということかもしれません。今すべて数えられなくてもよい。焦りも心配もないのです。明日の夜が残っているから。けれどもその先はわかりません。

胸の中に ひとつ ふたつと 刻まれる星を

今すべて数えきれないのは

.....

まだわたしの青春が尽きていないからです。

まだわたしの青春は尽きていない。星を全部数えてしまったら、もう自分の青春は尽きてしまうかもしれない、という思いがどこかにあるのでしょうか。しかしまだ尽きてはいない。

二十三歳の尹東柱。今は十一月初旬、五日ですが、その一か月後の一九四一年十二月八日には、日本軍による真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まります。戦時下のため、学校の授業は短縮され、三ヵ月繰り上げ卒業となります。この詩を書いたから五十日あまりで彼は延禧を卒業してしまうのです。同年十二月二十七日でした。

星ひとつに

卒業後どうするか。すでに彼は決意していました。日本への留学です。

北に光る星の下には故郷があり、南東の星の下にはまだ見ぬ日本があります。ある星は自分のこれまでを示しているようであり、ある星は自分の将来を告げているような気がします。星は無言でありながら、何かを語っているようです。星ひとつひとつがそれぞれ言葉をもっているようです。

星ひとつに 追憶と

星ひとつに 愛と

星ひとつに 寂しさ

星ひとつに 憧れと

星ひとつに 詩と

星ひとつに お母さん、お母さん、

お母さん、わたしは星ひとつに美しい言葉をひとつひとつ呼んでみます。小学校のとき机を並べた子らの名まえと、佩(ペ)、鏡(キョン)、玉(オク)、このような異国の少女たちの名まえと、もう赤ちゃんのお母さんになった娘たちの名まえと、貧しい隣人たちの名まえと、鳩、小犬、兎、らば、鹿、フランシス・ジャム、ライナー・マリア・リルケ、このような詩人の名まえを呼んでみます。

これらの人たちはあまりにも遠くにいます。

星が 目まいするほど遠いように、

お母さん、

そしてあなたは遠く北間島(プッカンド)におられます。

尹東柱の故郷である北間島龍井(ヨンジョン)は朝鮮と中国を隔てる豆満江の北側。当時は日本支配の「満州国」に属していました。ソウルから龍井は遠い。龍井はソウルからほぼ真北に一〇〇〇キロの距離です。帰るには一日一本の夜行列車を使って、およそ二十四時間かかります。さらに日本に行くとなればどんなに遠いことでしょうか。しかもソウルの学校でさえ、日本の支配の締め付けによって朝鮮語が禁止されてきている時代です。尹東柱は、奪われ、滅ぼされようとする朝鮮語に自分と自分の民族の命を感じて生きている詩人です。日本渡航は危険にさらされることです。けれども学びを深めることが自分の使命であれば、それを選ぶほかはありません。

故郷では、母が毎日自分のことを心配して祈ってくれているでしょう。父は、息子の日本渡航のために手続きをしてくれているはずで、何の手続きかという、創氏改名。日本に渡るためには尹東柱の名では叶わない。日本式に名前を変えなくては玄界灘を渡ることはできません。渡航証明書は日本の名前でないといけません。そのため「尹」の代わりに「平沼」とし、尹東柱は「平沼東柱(とうちゅう)」としなくてはなりません。代々継承してきた「尹」を「平沼」に変えるのは、一家にとってどんなに辛い、屈辱的なことでしょうか。

お母さん、

そしてあなたは遠く北間島(プッカンド)におられます。

わたしは何か恋しくて

このたくさんの星の光が降った丘の上に

わたしの名まえの字を書いてみて、

土でおおってしまいました。

たしかに 夜を明かして鳴く虫は

恥ずかしい名を悲しんでいるからです。

尹東柱は日本に渡るために名乗ることになる「平沼東柱」という名前の字を、星の光の下で、石か木片を取って土に刻んだのでしょうか。恥ずかしい名前です。あるいは「尹東柱」とも書いたかもしれません。書いてみて、土で覆ってしまいました。声を立てて泣いている秋の虫は、恥ずかしい名前を悲しんでいる。鳴く虫の声は自分の心です。

尹東柱はここで「星を数える夜」の詩を書き終えて、「一九四一、十一、五」と日付を書きこみました。

しかし何かこれで全部ではない気がする。恥ずかしい名を書いて、土で覆ってしまっ、悲しみに終わっていいでしょうか。こんなにたくさんの星の光が自分にも、丘の上にも降り注いでいるというのに。

けれども冬が過ぎて

やがて彼は、日付を記した次にもう四行を書き加えました。

けれども冬が過ぎて わたしの星にも春が来れば

墓の上に青い芝草が萌え出るように

わたしの名まえの字がうずめられた丘の上にも

誇らしく草が生い繁るでしょう。

秋も深まってまもなく冬になろうとしています。季節のことだけではない。日本という、自分が朝鮮人として朝鮮語で生きていくことを許さない国に行くのは、まさに冬を耐えることになるのではないか。

けれども冬が過ぎてわたしの星にも春が来れば

わたしの星。星のひとつに、彼は自分の尹東柱という名前を呼んでみたのかもしれませんが。わたしの星にも必ず春が来る。

どうしてここに「墓の上」という言葉が出てくるのでしょうか。彼は恥ずかしい名前を土で覆ったばかりではなく、自分自身が墓に葬られることを感じているかのようです。

けれども冬が過ぎて わたしの星にも春が来れば

墓の上に青い芝草が萌え出るように

わたしの名まえの字がうずめられた丘の上にも

誇らしく草が生い繁るでしょう。

二十三歳の尹東柱はすでにここで自分の死と、そして復活を予感して、決意し、覚悟しているかのようです。自分の青春が尽きてしまうまでに、残された時間はどれくらいあるでしょうか。

尹東柱は、翌一九四二年春、東京のキリスト教系学校である立教大学に留学しました。そこで彼は軍事教練を拒否したため、配属将校から憎まれ、圧迫を受けるようになりました。その年の秋、彼はこの同志社大学文学部英文学科に転入しました。六十九年前です。しかし翌一九四三年七月十四日、夏休みを前に、彼は下宿で下鴨警察署員に逮捕されました。治安維持法違反の疑念。日本国家を転覆させる意図をもって活動したというのです。朝鮮語で日記や詩を書くこと自体が、罪に問われることでした。

彼は京都地方裁判所で懲役二年の判決を受け、福岡刑務所に収監されました。そして一九四五年二月十六日、拷問、虐待の果てに衰弱、獄死しました。満二十七歳でした。

今日は、ちょうど七十年前に書かれた「星を数える夜」の詩をご紹介しましたが、同じ年同じ月、一九四一年十一月二十日に書かれた「序詩」を刻んだ尹東柱詩碑が、この今出川キャンパスに建てられています。

お前は立ち上がるであろう

遠い昔、ダニエルという預言者がいました。先ほど読んでいただいたのは旧約聖書・ダニエル書の最後のところでした。

「こう聞いてもわたしには理解できなかったので、尋ねた。『主よ、これらのことの終わりはどうなるのでしょうか。』彼は答えた。『ダニエルよ、もう行きなさい。終わりの時までこれらの事は秘められ、封じられている。多くの者は清められ、白くされ、練られる。逆らう者はなお逆らう。……終わるまでお前の道を行き、憩いに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められている運命に従って、お前は立ち上がるであろう』(一二章八節—一〇節、一三節)。

心配し、迷うことはある。苦しみは避けられない。しかしあなたは、あなた自身の道を行きなさい。神さまがあなたに託された使命を確かめ、それを引き受けて終わる時までまっすぐ道を行きなさい。一罅線これは七十年前に尹東柱が「星を数える夜」を書いたころに聞いた神さまの声、またそれから一年後にこの同志社大学で過ごす間に聞いた神さまの声かもしれません。

あなたは苦難を経て、必ず再び立ち上がるであろう。一あの詩を書いた尹東柱は、七十年を経た今、立ち上がってわたしたちに語りかけています。

わたしたちもまた困難があったとしても、自分に託された使命が何であるかを尋ね求め、確かめ、それを引き受けて、終わるまで真実にまっすぐ自分の道を進む。そのような人生の道は、輝く星の光をいっぱい浴びる道。苦難を通してイエス・キリストの復活に生かされる道です。